

[短 報]

高等教育機関に所属する学生のひきこもり親和性と抑うつ症状, SOC の関連

志渡 晃一¹⁾ 上原 尚紘²⁾ 佐藤 厳光²⁾ 五十嵐 礼奈³⁾ 米田 政葉³⁾ 堂端 さやか³⁾

- 1) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科
 2) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科博士前期課程
 3) 北海道医療大学看護福祉学部

キーワード

ひきこもり親和性, CES-D, 抑うつ症状, SOC

I 緒言

内閣府の調査¹⁾では、ひきこもり高親和群の割合は15歳から19歳では30.5%、20歳から24歳では18.3%であった。ひきこもり親和群の特徴として、他者からの評価への過敏さ、自己否定・不全感、孤立傾向²⁾、精神症状としてうつ・罪悪感を抱えている³⁾、自己の決定に関して他者からの干渉を避ける、友人関係における自己閉鎖的な傾向⁴⁾が挙げられている。これまでの我々の調査において学生の約6割が抑うつ症状を呈しており、関連要因として生活習慣や人間関係などが明らかになっている⁵⁾。これらの関連要因はひきこもり親和群の特徴と同様であり、抑うつ症状とひきこもり親和性の関連が考えられる。また、抑うつ症状との関連要因として首尾一貫感覚が学生を対象とした研究で合衆国国立精神保健研究所疫学的抑うつ尺度と負の相関を示すことが報告されている⁶⁾。そこで本研究では内閣府が行った、若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）に用いられた質問紙票を用いて、「ひきこもり親和性」と「抑うつ症状」、「首尾一貫感覚」の関連を明らかにする事を目的とした。

II 研究方法

1. 調査対象及び期間

高等教育機関に所属する学生1284名を対象に2012年7月～8月の期間で調査を行った。

2. 調査内容

1) 性や年齢等の基本属性4項目、2) 日常の健康習慣9項目、3) 普段の生活に対する満足感2項目、4) 過去の経験2項目、5) 合衆国国立精神保健研究所疫学的抑うつ尺度 (the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale : CES-D) 日本語

版20項目、6) 首尾一貫感覚 (Sense of Coherence : SOC) 日本語版13項目、7) いじめに関して12項目、8) ひきこもり親和性4項目と追加質問3項目、9) 不登校に関して5項目の計74項目である。

3. 集計と分析方法

1) 集計方法

回収した質問紙をもとに、データセットを作成した (表計算ソフト Microsoft Excel を使用)。分析項目はCES-D, SOC, ひきこもり親和性の項目である。CES-Dは20項目4件法で質問し0点から3点を配点した。合計点数は0点～60点の範囲であり、0点～15点を「低うつ得点」群、16点～60点を「高うつ得点」群に分類した。SOCは各項目を7段階で評価し、1点から7点を配置した。合計得点は13～91点の範囲であり、13点から45点を「低値群」、46点から59点を標準群、60点から91点を「高値群」と定義した。ひきこもり親和性は4項目4件法で質問し1点から4点を配点した。合計点数は4点～16点の範囲であり、4点から14点を「ひきこもり低親和群」、15点～16点を「ひきこもり高親和群」とした。

2) 分析方法

1) CES-DとSOC得点の相関、SOC水準ごとのCES-D得点の平均値の差を比較。

2) ひきこもり親和性とCES-Dの相関、ひきこもり親和性2水準のCES-D平均値の差を比較。

3) SOCとひきこもり親和性の相関、SOC水準ごとのひきこもり親和性平均値の差を比較した。

III 倫理的配慮

調査対象者に、1) 結果の公表にあたっては、統計的に処理し、個人を特定されることはないこと、2) 得られたデータは、研究以外の目的で使用しないこと、3) 調査に参加しないことでの不利益を被ることはないこと、かつ途中での同意撤回を認めるという条件を書面において十分に説明し、口頭でも説明した。同意した対象者のみ質問紙票に記入を依頼した。

<連絡先>

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757
 北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科
 Email: kochan@hoku-iryo-u.ac.jp

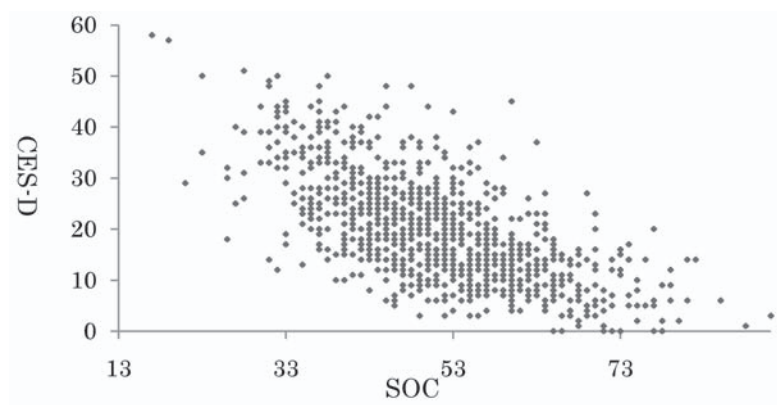


図1 CES-D と SOC の相関

(N=979, $r=-0.65$, $p<0.05$ by Pearson)

表1 SOC と CES-D の平均値

SOC	度数	平均値	(95%CI)	p
低値群	303	27.9	(26.8-29.1)	
標準群	466	17.7	(17.0-18.4)	a
高値群	210	10.8	(9.9-11.7)	ab

SOC: 13 点から 45 点を低値群, 46 点から 55 点を標準群, 56 点から 91 点を SOC 高値群とした.

a: $p<0.05$ vs 低値群(Tukey test)

b: $p<0.05$ vs 標準群(Tukey test)

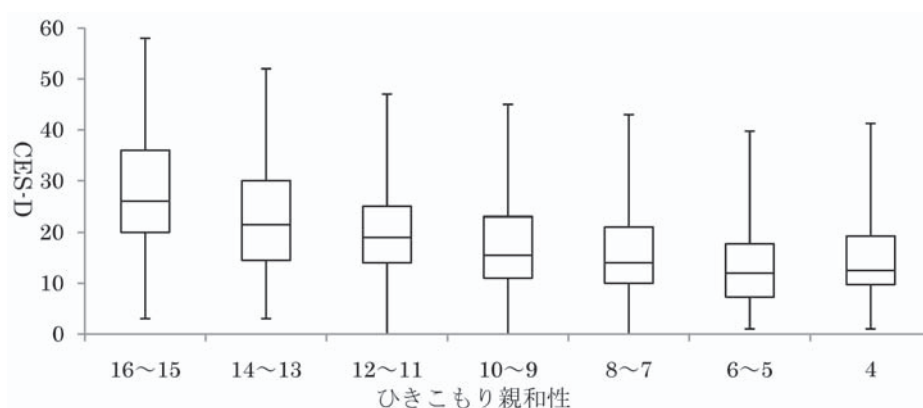


図2 ひきこもり親和性得点ごとの CES-D 得点の分布

ひきこもり親和性: 4 点から 14 点を低親和群, 15 点から 16 点を高親和群とした.

箱ひげ図: 上限がデータの最大値, 下限が最低値, 箱の下端が最小値から 25% 点, 箱の上端が最小値から 75% 点、箱中の線がデータの中央値を示す.

表2 ひきこもり親和性と CES-D の平均値

ひきこもり親和性	度数	平均値	(95%CI)	p
ひきこもり高親和群	129	27.6	(25.63-29.60)	*
ひきこもり低親和群	826	18.1	(17.51-18.83)	

ひきこもり親和性: 4 点から 14 点をひきこもり低親和群, 15 点から 16 点をひきこもり高親和群とした.

*: $p<0.05$ t 検定

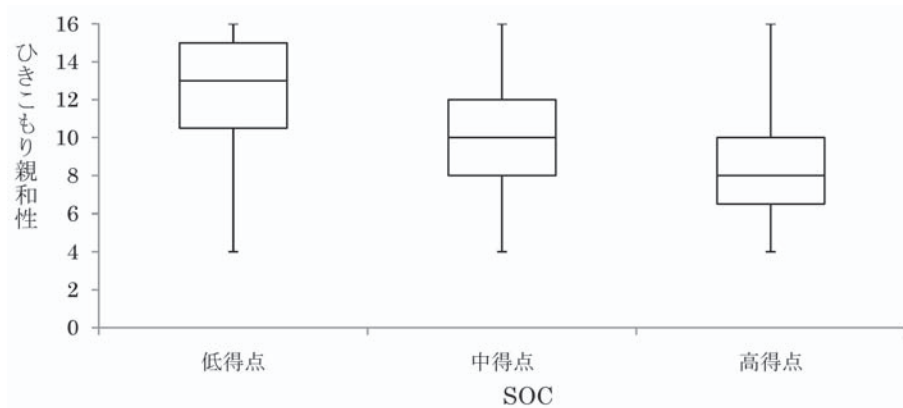


図3 SOC 3群ごとのひきこもり親和性の分布

SOC：13点から45点を低値群，46点から55点を標準群，56点から91点を高値群とした。

ひきこもり親和性：4点から14点を低親和群，15点から16点を高親和群とした。

箱ひげ図：上限がデータの最大値，下限が最低値，箱の下端が最小値から25%点，箱の上端が最小値から75%点、箱中の線がデータの中央値を示す。

表3 SOC とひきこもり親和性の平均値

SOC	度数	平均値	(95%CI)	p
低値群	295	12.34	(12.00-12.68)	
標準群	453	10.01	(9.71-10.30)	a
高値群	210	8.68	(8.28- 9.70)	ab

SOC：13点から45点を高値群，46点から55点を標準群，56点から91点を高値群とした。

a: $p < 0.05$ vs 低値群(Tukey test)

b: $p < 0.05$ vs 標準群(Tukey test)

IV 結果

1. 集計

在籍者数1284名のうち1048名から回答を得た（回収率81.6%）。回答に不備のあったものを除く，979名（有効回答率93.5%）を以下の分析対象とした。

2. CES-D の分布

全体での高うつ群（CES-D 得点16点以上）の割合は58.1%であった。

3. SOC と CES-D の関連

図1に見られるようにSOC 得点が高くなればなるほど，CES-D 得点は低くなる負の相関がみられた。

($r = -0.65$)。また表1にみられるように，CES-D 得点の平均値はSOC 低値群に比べて標準群、高値群が低く，標準群に比べて高値群が低かった。

4. ひきこもり親和性の分布

全体でのひきこもり高親和群（ひきこもり親和性15点から16点）の割合は13.5%であった。

5. ひきこもり親和性と CES-D の関連

ひきこもり親和性得点とCES-D 得点は正の相関がみられ ($r = 0.40$)，図2に見られるようにひきこもり

親和性の得点が高くなればなるほど，CES-D の得点も高くなる傾向がみられた。

表2に見られるようにCES-D 得点の平均値はひきこもり低親和群に比べてひきこもり高親和群が高かった。

6. ひきこもり親和性と SOC の関連

ひきこもり親和性とSOC 得点は負の相関がみられ ($r = -0.41$)，図3にみられるようにSOC 得点が高くなればなるほど，ひきこもり親和性が低くなる傾向が見られた。

表3に見られるように，SOC 低値群に比べて標準群、高値群のひきこもり親和性の平均値が低く，標準群に比べて高値群のひきこもり親和性の平均値が低かった。

V 考察

本研究では高等教育機関に所属する学生を対象にSOC とCES-D，ひきこもり親和性の関連について検討した。本研究の対象者の高うつ群の割合は58.1%であった。この結果はこれまで学生を対象として行われてきた調査と同様に高い割合であった。ひきこもり高親和群の割合は13.5%であり，内閣府の調査における15歳から19歳の30.5%，20歳から24歳の18.3%に比べ

て低い割合であった。これは調査対象者が授業に在籍している学生であるため、200の地点で無作為に対象を抽出した内閣府の調査に比べて引きこもり親和性が低い割合で検出されたと考えられる。

SOC と CES-D の関連について、これまで行われた調査⁷⁾⁸⁾と同様に SOC が高まるほど CES-D 得点下がるという負の相関関係が本研究においても認められた。CES-D の平均得点に関しても SOC の区分が低値群よりも中値群が高く、中値群に比べて高値群が高かった。これは、これまで澤目らが看護学生を対象に行った調査結果と合致する⁹⁾。加えて、今回 SOC と ひきこもり親和性との関連を検討した結果、SOC が高まるほど、ひきこもり親和性が低い方向に推移するという関係がみられた。また、SOC の区分ごとにひきこもり親和性の平均得点を比較しても差がみられた。これらのことから SOC を高めることが抑うつ症状を緩衝するだけでなく、ひきこもりを予防する要因としての可能性が示唆され、興味深い結果であると考ええる。

今後の課題として、SOC を高める支援に用いるために、より SOC を分かりやすくする「見える化」を図る必要がある。SOC と ひきこもり親和性の関連を検討した知見が少ないため、より詳細な検討を行うためにも今後も継続した調査を行うことが挙げられる。なお、本研究は横断調査のため、抑うつ症状の関連要因に関して因果関係を言及するには至らないことを留意しなければならない。

VI 謝辞

本研究の趣旨にご理解いただき、協力してくださった方々に、心より感謝致します。

付記

本研究の一部は喫煙科学研究財団の支援を受けて行ったものである。

文献

- 1) 内閣府. 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査). 2010.
- 2) 松本剛. 大学生のひきこもりに関連する心理的特性に関する研究. カウンセリング研究. 2003; 26; 38-46.
- 3) 渡部麻美、松井豊、高塚雄介. ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討. 心理学研究 2011; 81: 478-484.
- 4) 牧亮太、海田梨香子、湯澤正道. ひきこもり親和性の高い大学生における心理的特徴の検討 : 友人関係、不快情動回避傾向、早期完了特徴との関連について. 広島大学心理学研究. 2010; 10: 71-78.

- 5) 志渡晃一、澤目亜希、工藤悦子、他. 本学新入生におけるライフスタイルと健康に関する研究 (第10報). 北海道医療大学看護福祉学部紀要. 2010; 17: 31-36.
- 6) 志渡晃一、澤目亜希、上原尚紘、佐藤厳光、池森康裕、長谷川聡. 首尾一貫感覚 (SOC) と抑うつ症状との関連 : 高等教育機関に所属する学生を対象として. 北海道医療大学看護福祉学部紀要. 2011; 18: 43-48.
- 7) 澤目亜希、上原尚紘、佐藤厳光、蒲原龍、岡田栄作、志渡晃一. 大学生・専門学校生の抑うつ症状とその関連要因—首尾一貫感覚の可能性—. 北海道公衆衛生学雑誌. 2011; 25(2): 147-152.
- 8) 戸ヶ里泰典. 東京大学社会科学研究所若年・壮年パネル調査—大規模多目的一般住民調査向け東大健康社会学版 SOC 3 項目スケール. 2008; No. 4.
- 9) 澤目亜希、上原尚紘、佐藤厳光、蒲原龍、岡田栄作、志渡晃一. 看護系専門学校生の抑うつ症状とストレス対処能力 (SOC) との関連について. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2011; 7(1): 89-92.

受付: 2012年11月30日

受理: 2013年1月31日